

同志社大学

2021 年度 卒業論文

「ネットワークにおける他者との関係」と「ジェンダー自尊心」による  
カミングアウトの受容傾向

社会学部社会学科  
学籍番号：1109181037  
氏名:小崎 舞花  
指導教員名：立木茂雄  
(本文の総字数：21590 字)

## 要旨

論題：「ネットワークにおける他者との関係」と「ジェンダー自尊心」による  
カミングアウトの受容傾向

学籍番号：1109181037

氏名：小崎 舞花

近年、「性の多様性」問題は世界的に議論されている。日本においてもメディアなどで取り上げられることも増え、性の多様性への理解は進んできているようにも思える。しかし、セクシャルマイノリティの方々への差別や法整備の不備、カミングアウトに伴う抵抗感などまだまだ問題は山積みである。したがって本研究ではカミングアウトの受容度に焦点を当て、「ネットワークにおける他者との関係」と「ジェンダー自尊心」がカミングアウトの受容度に与える影響について研究することとした。そこで先行研究をもとに、ネットワークにおける紐帯の強度、密度、ジェンダー自尊心を独立変数として設定、仮説を作成し、大学生を対象としたオンラインの質問紙調査を実施した。結果、「紐帯の強度、またはジェンダー自尊心が高いほどカミングアウト受容度が高くなる」ということがわかった。また、仮説の他に性自認とカミングアウト受容度の関連性についても明らかにすることができた。

キーワード：セクシャルマイノリティ、カミングアウト、ネットワーク分析

## 【目次】

1	はじめに	1
1.1	研究の背景	1
	(1) セクシュアリティへの関心の高まり	1
	(2) 関心を抱いた経緯	1
2	先行研究	2
2.1	社会学におけるセクシュアリティ	2
	(1) セクシュアリティ	2
	(2) ギデンズの『社会学』から見るセクシュアリティ研究の歴史	3
	(3) ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度	4
2.2	社会学におけるネットワーク	4
	(1) ネットワーク分析	4
	(2) グラノヴェターの理論から見る紐帯の特徴	5
	(3) 密度とネットワーク	5
2.3	本研究の目的と意義	6
2.4	本研究の仮説モデル	6
3	方法	7
3.1	調査の概要	7
3.2	調査項目	7
3.3	分析に伴う独立変数・従属変数	8
	(1) 独立変数	8
	(2) 従属変数	9
4	結果	10
4.1	単純集計	10
	(1) 属性について	10
	(2) ネットワークの紐帯項目について	10
	(3) ジェンダー自尊心について	10
	(4) カミングアウト受容度について	11
4.2	分析結果	12
	(1) 相関分析	12
	(2) 分散分析	12
	(3) 重回帰分析	13
5	考察	16
6	結論	17
	参考文献	19

# 1 はじめに

## 1.1 研究の背景

### (1) セクシュアリティへの関心の高まり

「セクシュアリティ (Sexuality)」とは、男女の二者一択の判断や異性愛のみが正しいといった見方ではなく、人それぞれに各々の性自認や性的指向が存在するという性における生き方の多様性を示した言葉である。その中でも特に「セクシャルマイノリティ (Sexual minority)」に対する差別・批判に関して、現代では世界中が議論している。マイノリティという表記の仕方には、マジョリティ/マイノリティと線引きをする差別的ニュアンスが含まれていることから、新たに LGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Questioning) という呼称も生まれた。2008年12月18日には LGBTQ に対する人権保護の促進を求める声明が、66か国の支持によって国連総会に初提出され、更に世界的に注目を集める社会問題となった。これ以降、世界各国での LGBTQ に配慮した社会制度の確立・改正や、多くの差別・批判に対する措置が行われてきた。このような世界情勢を受けて、日本でも近年セクシュアリティ問題への関心は高まってきたように思われる。2017年3月14日に、日本政府がいじめ防止対策法案に LGBTQ の生徒の保護項目を追加、更には自治体によるパートナーシップ制度も確立された。メディアにおいても取り上げられることが増え、オネエタレントなどの台頭や性の多様性要素を含むドラマやアニメなどの影響もあり、当事者だけでなく、普遍的な多くの国民がセクシャルマイノリティの概念に触れるところとなった。しかし、こういった現状の中でもいまだセクシャルマイノリティへの差別・制度の不備は消えたわけではない。同性婚の法律はいまだ整備されていない。また学校や職場における LGBTQ 差別やそれに伴う当事者のカミングアウトの抵抗感なども問題に上げられている。社会という広い範囲において、性の多様性に関する問題はまだまだ山積みである。

### (2) 関心を抱いた経緯

筆者が本テーマに関心を抱いたのは、筆者自身の発見と大学で学んだ知識がきっかけである。私は物心ついたころから、自身の恋愛事情 (やセクシュアリティ) の話題を家族にすることはなかった。その理由は、私の中でこういった話は非常にセンシティブなものであったため、自分の心の繊細な部分をさらけ出すことに対する「不安感」と、親しい身内に自身を否定されるのではないかという「恐怖感」を感じていたからである。しかし、高校・大学進学に伴い、様々な価値観やバックグラウンドを持つ人々との交流を持つようになったとき、自身の恋愛事情やセクシュアリティについて話せるコミュニティは人によってそれぞれであることを知った。家族・友人・知り合いという広い範囲で話せる人もいれば、数人の非常に狭いコミュニティでしか話さないという人もおり、そのレベルは一様ではなかった。この差異の発見から、私は性の多様性という分野に興味を抱き始めた。その後、大学の授業で『社会学入門』の中から自身の興味ある社会問題の章を読み、発表する機会があった。私は第12章「セクシュアリティ」を選択したのだが、その章の中に興味深い調査内容があった。セクシャルマイノリティに対する意識調査というその調査の結果は、友人や同僚より、自身に身近な兄弟や子どもの方がセクシャルマイノリティであるとカミングアウト

されたときの抵抗感が高まるというものであった。つまり、セクシャルマイノリティの方々への理解は社会的に促進されているように見えるが、実際には当事者との関係性によってその受容度合というものは変化する可能性があることがわかったのである。筆者はこの2つの経緯から、本テーマに関心を抱き、研究を始めることとした。

## 2 先行研究

### 2.1 社会学におけるセクシュアリティ

#### (1) セクシュアリティ

前述したように、「セクシュアリティ (Sexuality)」とは、男女の二者一択の判断や異性愛のみが正しいといった見方ではなく、人それぞれに各々の性自認や性的指向が存在するという性における生き方の多様性を示した言葉である。つまり、「体通りの性を持つ」「身体性通りの服装をし、その“性”らしく生きる」「異性に恋愛感情を持つ」といった身体に起因したこれまでの男女二元論の概念を否定するものである。

葉師・笹原・古堂・小川(2019)から参照すると、セクシュアリティは4要素から構成される。1つ目は「自認する性 (Gender Identity)」、これは身体的性に左右されない自分で認識している自身の性別のことを指し、一般的に性自認と呼ばれる。次に2つ目は「からだの性 (Sex)」、これは身体的な特徴や染色体などによって判断されるものを指す。3つ目は「好きになる性 (Sex Orientation)」、これは恋愛感情や情緒的・性的関心がどの性別に向かっているかを指し、一般的には性的指向と表される。最後に4つ目は「表現する性 (Gender Expression)」、これは服装や言葉遣いなどをどう表現したいのかを指すものであり、性自認での性別とは必ずしも一致するわけではない。そしてセクシュアリティは一般的に、「からだの性」と「自認する性」から判断されるものと、「自認する性」と「好きになる性」から判断されるものがある。まず前者の判断基準によってセクシュアリティは、出生時に割り当てられたからだの性が一致している「シスジェンダー (cisgender)」、出生時に割り当てられたからだの性と自認する性が異なる「トランスジェンダー (transgender)」、そしてトランスジェンダーの内、自認する性を男性・女性のいずれかとは認識していない「Xジェンダー」に分けられる。このXジェンダーの中においても、男性女性のどちらでもあると自認している「両性」、男性女性の間であると自認している「中性」、男性女性のどちらでもないを辞任している「無性」に分けられる。次に後者の判断基準によって、自認する性が女性の場合、男性が、自認する性が男性の場合、女性が恋愛や性愛の対象になる「異性愛者：ヘテロセクシュアル (Heterosexual)」、自認する性と好きになる性が同じである「同性愛者：ホモセクシュアル (Homosexual)」、好きになる性が異性の場合も同性の場合もある人を指す「両性愛者：バイセクシュアル (Bisexual)」、いかなる他者も恋愛や性愛の対象にならない人を指す「無性愛者：アセクシュアル (Asexual)」、最後にすべてのセクシュアリティの人が恋愛や性愛の対象となる人を指す「全性愛者：パンセクシュアル (Pansexual)」に分けられる。

加えて、ここでは述べたセクシュアリティの分類名について詳しく述べたが、これはあくまでも代表例に過ぎない。そもそもセクシュアリティの分類の境界性は曖昧であり、セ

クシュアリティとはグラデーションのようなものである。人それぞれに自身の思うセクシュアリティの在り方があり、想定していたセクシュアリティの移り変わりも存在する。さらに「セクシュアリティを認識するための必要な情報の有無」や「セクシュアリティの受容の可否」「環境・状況」などによって表現の仕方が異なることもある。

## (2) ギデンズの『社会学』から見るセクシュアリティ研究の歴史

伝統的社会においてセクシュアリティは生殖機能と密接に結びついているとされていた。しかし、人間の性行動は遺伝的に構築された本能よりも環境によって左右される

(Rise et al 1984)。そして性的魅力の判断基準が文化によって異なるように、ほとんどの性的反応は学習的である (Ford & Beach 1951) という見解から、近年ではセクシュアリティとは生き方の多様性を指すというのが一般的となった。欧米における性文化を参照してみても、宗教的要因による性行動への厳格な風習も 1960 年代からの寛大な態度の情勢により希薄となっている。また文化的要因 (伝統的要因) によって引き起こされていた、男性と女性とでは性的活動に対する周囲の態度が異なるというダブルスタンダードもその勢いを落とした (Kinsey et al 1948=1953, Rubin 1990)。

つぎに同性愛に焦点を絞り、研究の歴史を紐解いていく。同性愛という概念は 18 世紀以前にはほとんど存在しなかった (Foucault 1978)。1860 年代に「ホモセクシュアリティ」という用語が誕生して以降、同性愛者は次第に特定の性的倒錯を行う異端な種類人間であるとみなされるようになり (Weeks 1986)、同性愛は以前の宗教的な罪の対象よりも「医療対象」として議論を呼ぶこととなった。ケネス・プラマー (Kenneth Plummer, 1946-) は近年では古典となった研究で、欧米文化での同性愛を 4 つの類型で示した。本質的な性的志向には影響のないその場限りの「一時的な同性愛」、同性愛が一般的な環境で生じる異性愛の代替品としての「状況から生じた同性愛」、活動環境から孤立しているため性的指向を隠している「私事化した同性愛」、カミングアウトし同性愛者との付き合いがライフスタイルに取り組まれている状態の「生き方としての同性愛」である。同性愛者は過去に極めて顕著な非寛容的態度をとられてきた。こういったいわゆる同性愛嫌悪 (1960 年代発祥の用語) が緩和され始めたのはごく最近の出来事なのである。同性愛者の市民的権利を求める活動の世界的な高まりは、1960 年代における人種的・民族的誇りを強調した社会運動の産物として始まった。代表例は 1967 年 7 月にアメリカのニューヨークで起きた「ストーンウォール暴動」である。国家警察によるゲイコミュニティへの度重なる嫌がらせをきっかけに、両者は 2 日間に渡って衝突を繰り返し、想像もつかないほどの大衆行動となった (Weeks 1977, D'Emilio 1983)。このストーンウォール暴動はのちに「カミングアウト」「スティグマの削除」「セクシャルマイノリティの平等な権利取得」への先駆けとなった。また、2004 年 5 月 17 日にアメリカマサチューセッツ州では同性愛者間の婚姻を認められた。それにもかかわらず、実際はアメリカ国民の 55% はいまだ同性愛者間の婚姻に一貫して反対している現状であったのだ (Gallup 2004)。

以上のことから、ここ数十年間でセクシュアリティに関する考えは劇的な変化を見せているが、その一方でセクシャルマイノリティの人々に対する差別の眼差しはいまだ市民社会に深く根付いており、社会と市民の間でその認識にギャップが存在している可能性が高いと思われる。

### (3) ジェンダー自尊心と同性愛者に対する態度

異性愛者の同性愛者に対する態度に関しては性差が存在する。相対的にみると、女性より男性の方が同性愛者に対して否定的態度 (Sexual prejudice) を示すことが多く (Herek 2002)、特に男性同性愛者に対する態度が最もこの度合が高いとされている (Kite & Whitley 1996)。この性差に影響を与えている要因として考えられるものが「ジェンダー自尊心 (Gender self-esteem)」の観点である (Falomir-Pichastor & Mugny 2009)。ここでいうジェンダー自尊心とは、自身の性別に基づくアイデンティティへの自己評価を指す。鈴木・池上 (2015,2020) の研究では、男性異性愛者と女性異性愛者では同性愛者に対する態度が異なるという結果が示されている。男性異性愛者の場合、ジェンダー自尊心が高いほどそれを維持しようとする心理が働き、同性愛者に対して否定的態度を示しやすい。一方女性異性愛者の場合は、男性異性愛者とは異なりジェンダー自尊心が高いほど女性同性愛者に対して好意的な態度を示す傾向にあるのである。この女性異性愛者の行動の理由としては、同性愛者に好意的な態度を示すことでジェンダー自尊心を維持している可能性や、もともとジェンダー自尊心が高く共感性の高い女性異性愛者であった可能性などが挙げられている。またどのような場合においても女性異性愛者はジェンダー自尊心が一貫して同性愛者への否定的な態度変容の抑制効果を持つが、男性異性愛者の場合には同性愛者一般に対する態度と調査対象者の親しい間柄の相手に対する態度では、ジェンダー自尊心の持つ効果は異なるということが分かっている。

## 2.2 社会学におけるネットワーク

### (1) ネットワーク分析

マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864-1920)、エミール・デュルケム (Emile Durkheim, 1858-1917)、ゲオルグ・ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) 等社会学者が、各々の社会学理論に基づいて相互作用を据えていたように、社会学は古くから「関係(つながり)」に注目する学問であった。「社会ネットワーク論」とはこのようなつながりに注目してきた社会学研究の中で生まれたものであり、「社会で生きていく中での関係性」を対象にした社会学理論である。社会ネットワークは時の流れの中で生まれ、維持・変化・消失し、時としてそれに対して私たちは働きがけをしたり、影響を受けたりする。そしてネットワークには様々な概念が存在する。行為者間の関係の強さを表す「紐帯の力」やネットワーク内の「密度」、ネットワークの中で対象者がどのような位置に属しているのかという「中心性」、ネットワーク内の行為者の持つ「媒介性」、ネットワークからその内部の人への「拘束」などである。加えて、社会学の対象とするネットワークの規模は、個人レベルのパーソナルネットワークから組織・国などの大きなレベルのネットワークまで多岐にわたる。

このような社会ネットワーク分析では、そのネットワークの規模や研究目的に則して2種類の分析方法を持つ。まず1つ目は、特定の個人 (世帯や組織) を単位とする「エゴセントリック・ネットワーク (egocentric network)」である。ここで対象となるネットワークはその特性からパーソナルネットワーク (Personal network) と呼ばれる。そして2つ目は、一定の領域を持つ地域や社旗の中に含まれる諸個人を視野に入れ、その相互関連を表す「ソシオセントリック・ネットワーク (sociocentric network)」である。また、これらの方法でネ

ネットワーク分析を行う場合、ネットワーク（ある人や物とそれと関係性のあるものとの関係性）を図に表し、人を表す点「ノード」とその点と点を繋ぐ線「紐帯」を可視化することが一般的に用いられる分析の手順である。

また、社会ネットワーク論の議論をするにあたって「社会関係資本（ソーシャルキャピタル）」という概念に触れることは必要不可欠である。ジェームズ・S・コールマン（James Samuel Coleman, 1926=1995）はこれを、行為を促す人々間の関係が変化することで、個人間の関係の中に生まれるものであり、社会での信頼関係やネットワークの重要性を説く概念である、と定義した。すべての社会関係と社会構造は、何らかの形態の社会関係資本を促進するものであり、それは対象のネットワークに伴い、「恩義や信頼」「情報流通可能性」「制裁を伴う規範」と3種類の形態に分類される。そしてネットワーク内の行為者は何らかの目的に基づいて関係を作り、その関係から何らかの利益が得られる限り関係性を維持していく。また社会関係資本は他の様々な資本と異なり、大部分が公共財的な性質を備えていることが特徴である。社会関係資本は個人が他者との関わりの中で創出するものであるが、その反面社会関係資本を創出することで生み出される利益の大半はその行為者以外の他者によって享受されることがほとんどなのである。つまり個人の意図とは関係なしに発生・消滅することもあるのだ。この公共財的な性質は、若者や子どもなどの人的資源の形成において非常に重要な役割を担っている。

## (2) グラノヴェターの理論から見る紐帯の特徴

マーク・S・グラノヴェター（Mark S. Granovetter, 1943-）は1973年に『strength of weak ties（弱い紐帯の強さ）』という論文で、弱い紐帯に焦点を当て、強い紐帯では見られない強さと重要性を明らかにした。グラノヴェターはアメリカボストン郊外に住むホワイトカラーの男性282人を対象として、就職活動における情報を入手するネットワークに関して、調査票を用いて仮説立証を行った。調査結果は、強い紐帯のネットワークから仕事を得ていた人は全体の16%、そして弱い紐帯から仕事を得ていた人は全体の内84%となった。この研究結果から、グラノヴェターは紐帯の強度における2つの特性を見出した。まず1つ目は、強い紐帯はその特徴から自身の似通る情報を持つことが多く、弱い紐帯は自分と異なった情報を持つことが多いということである。次に2つ目は、強い紐帯はその緊密なネットワークの特性ゆえに外部との遮断が起きる可能性が高いが、弱い紐帯を持つことで遮断されたネットワークの中で外部との「橋渡し」的な役割を担うことができるということだ。

以上のグラノヴェターの研究から、弱い紐帯は新しい情報の入手に繋がるといったように、強い紐帯とはまた違う視点で個人に影響を与えることが分かった。個人のネットワーク（パーソナルネットワーク）において、「弱い紐帯」は当事者の情報入手性において良い影響をあたえ、「強い紐帯」はカミングアウトなどにおいて良い影響をあたえるという可能性から、セクシュアリティ研究と組み合わせた場合にも同様に非常に重要な観点になるのではないかと考える。

## (3) 密度とネットワーク

「密度」は社会学のネットワーク分析において、その内部の構成員同士の関係の密接さ



を表すために使われる特性である。構成員同士がお互いに関係を持っているほど密度は高く、構成員同士の関係が希薄であるほど密度は低い。密度の高いとされたネットワークでは、直接的な関係が相互的に結びつけられているため、この中の人々は非常に均一的な価値観を持ち類似した行動をとる傾向にあり、一方密度の低いネットワークでは、価値観や規範に多様性が存在するため、このネットワーク内の人々は多様性に富んだ行動をする傾向にある（安田 1997）。また、ソーシャルキャピタルの観点からもネットワークにおける密度は議論されてきた。密度が高さは協調性や団結力があり安定的であるという利点がある反面、同質的が故に排他的行動が起こるという傾向を持つ。一方、密度の低さは関係の希薄さにより脆弱で不確実ではあるが、その反面多様性があり情報収集能力に長けているという利点がある。そのため仲介力という面では密度の低いネットワークがソーシャルキャピタルとして有能であり、団結力という面では密度の高いネットワークがソーシャルキャピタルとして優れているということがいえる。

### 2.3 本研究の目的と意義

日本を含む世界中で性の多様性概念やセクシャルマイノリティに対する関心は高まりを見せている。しかし、市民レベルではいまだセクシャルマイノリティに対する抵抗感、または当事者との関係性により受け入れられないという現状が存在している。セクシャルマイノリティの方々がより生きやすい環境を目指している社会と、市民（個人）とのレベルではその受け止め方にギャップがあるのである。また、個人視点においてもセクシャルマイノリティの受容度合には、ネットワークの親密さや身近さによって差がみられた。さらにジェンダー自尊心やそれに伴う性差という観点においてもセクシャルマイノリティに対する態度が変容することが分かった。

そこで本研究では、セクシュアリティ概念により触れてきた若い世代である大学生を対象とし、『他者からのカミングアウトにおいて、「ネットワークにおける他者との関係」と「ジェンダー自尊心」は異性愛者の受容傾向にどのような変化をもたらすのか。また、両者に関係性はあるのか』というリサーチクエストionsを検証していくこととする。ここでの「ネットワークにおける他者との関係」は「ネットワークの紐帯の強度」と「ネットワークの密度」によって構成されるものとする。

以上、本研究のリサーチクエストionsの検証結果を明らかにすることで、これから社会を担っていく若者世代におけるセクシャルマイノリティや性の多様性に対する理解の浸透に関して、さらにネットワークやジェンダー自尊心とカミングアウト受容度の関連性について正確に把握することができると考える。

### 2.4 本研究の仮説モデル

前章での先行研究を踏まえて、本研究では下記の図1のように仮説モデルを作成した。カミングアウト受容度に対して影響を与える要因を「紐帯の強さ」「密度」「ジェンダー自尊心」の3つに設定し、ジェンダー自尊心に関しては調査対象者のセクシュアリティとの関連性についても検証することとする。3つの要因との関係に関して筆者が立てた仮説は、「紐帯の強さが強いほど、カミングアウト受容度は高くなる」「ネットワークの密度が高いほど、カミングアウト受容度は低くなる」「ジェンダー自尊心が高いほど、カミング

アウト受容度は低くなる」である。紐帯に関しては、先行研究でグラノヴェターの弱い紐帯の強さについて述べたが、カミングアウト受容度と弱い紐帯の利点である情報の入手容易性は関連性が低いと考えられるため、強い紐帯に注目して仮説を立てた。密度に関しては、密度の高さは協調性や団結力がある反面、排他的傾向があるという点から、今回は負の相関になると仮定した。ジェンダー自尊心は自身の性別への自己評価が高いほど、自己以外のセクシュアリティに対して排他的思考を促すのではないかという推測に基づき、負の相関と仮定した。しかし、鈴木・池上（2015,2020）の研究結果では男女によってジェンダー自尊心と同性愛者への態度の関係性が異なっていたため、今回の研究での結果が仮説を立証できるに値するものであるかは定かではない。

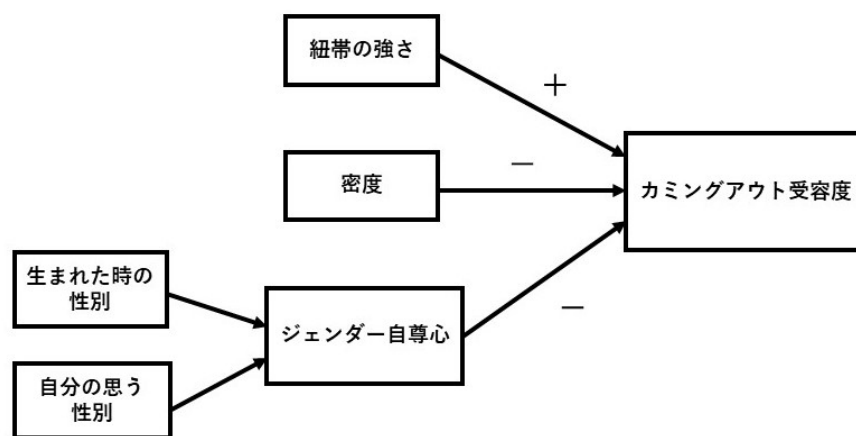


図1 仮説モデル

### 3 調査

#### 3.1 調査の概要

調査は、2021年の11~12月の期間において、グーグルフォームを使用したオンラインでの質問紙調査である。調査対象者は、比較的「性の多様性」の概念に触れてきたと思われる男女大学生に設定した。質問紙調査は「大学生の交友関係と価値観に関する調査」を目的とし、質問紙冒頭には調査結果は匿名性を持ち、研究目的でのみデータを使用することを明記した。結果、合計102名から回答を得ることができた。回答はすべて数値化し処理を行い、統計解析ソフトのSPSSを用いて分析した。

#### 3.2 調査項目

今回の調査では、ネットワーク分析で用いられる方法の中でも「想起法」「ポジション・ジェネレータ方式」を採用して質問紙作成に臨む。「想起法」とは、挙げてもらう人物のリスト化せず、回答者の自由な選択に任せる方法である。この方法は、大規模な範囲に有効で

あるものの、その一方質問文による回答者のイメージのズレが生じないように注意しなければならない。次に「ポジション・ジェネレータ方式」とは、家族・同僚などのメンバーの社会カテゴリを挙げてもらう方式である。

さらに質問紙の作成にあたって以下の6点に注意して作成を行った。

- ①回答者にわかりやすい言葉遣いをする。
- ②複数の解釈が可能な曖昧な表現は避ける。
- ③一つの質問に複数の内容を含めない（ダブルバーレルの回避）。
- ④誘導的な質問はしない。
- ⑤答えやすい質問から答えにくい質問の順で質問を構成する。
- ⑥回答者の負担軽減のため質問量の表示をする。

質問紙は、大きく5つの「基本属性」「ネットワークの紐帯の強度」「ネットワーク密度」「セクシャルマイノリティのカミングアウト受容度合」「ジェンダー自尊心」の順で構成している。この中でも紐帯・密度・カミングアウトの質問は、調査対象者に自身と最も親しいと感じる人物を想起してもらうこと（想起法）を前提とした。

基本属性の項目は、「年齢」「住居形態」「所属コミュニティ」「出身地（市区町村）」「居住地域（市区町村）」「生まれた時の性別」「自分の思う現在の性別」を使用した。自分の思う現在の性別に関しては、性別のグラデーション論に則して「1 男性、2 どちらかといえば男性よりである、3 男性・女性の間である、4 どちらかといえば女性よりである、5 女性、6 男性・女性どちらでもある、7 男性・女性のどちらでもない」の7作法で回答を求めた。

「ネットワークの紐帯の強度」「ネットワーク密度」「セクシャルマイノリティのカミングアウト受容度（CO 受容度）」「ジェンダー自尊心」の項目、尺度編成に関しては、以下の分析に伴う独立変数と従属変数で詳しく述べることとする。

### 3.3 分析に伴う独立変数・従属変数

本研究では因果関係に焦点を当てるため、因果関係や仮説において原因となる概念を表現した「独立変数」と結果となる概念を表現した「従属変数」を定める必要がある。今回は「ネットワークの紐帯の強度」「ネットワークの密度」「ジェンダー自尊心」「自分の思う現在の自身の性別」の4項目を独立変数とし、「セクシャルマイノリティのカミングアウトの受容度合（CO 受容度）」を従属変数に定めた。

#### (1) 独立変数

「ネットワークの紐帯の強度」を測る項目は「関係性」「連絡頻度」「知り合ってから期間」の3項目を用いた。「関係性」項目に対しては、想起した人物との関係性を「家族/友人/親友/職場の仲間（アルバイトも含む）/サークルや部活仲間/その他」6件法で尋ね、それぞれ「家族=1/友人=2/親友=3/職場の仲間（アルバイトも含む）=4/サークルや部活仲間=5/その他=6」と数値変換を行った。また「その他」を選択したデータでは5ケース中4ケースが「恋人」であったため、新たに「恋人=6/その他=7」と数値変換の変更を行った。次に、「連絡頻度」項目に対しては「頻繁に連絡を取る（少なくとも週2回以上）/ときどき連絡を取る（月に1回程度）/あまり連絡は取らない（年1回以上月1回以下）/めったに連絡を取らない（年1回以下）」の4件法で尋ねた。しかし、集計した

データ内で「めったに連絡を取らない（年1回以下）」が1ケースしかなかったため、「あまり連絡は取らない（年1回以上月1回以下）」と「めったに連絡を取らない（年1回以下）」の項目をカテゴリ合成し、新たに「あまり／めったに連絡はとらない（月1回程度以下）」を作成した。加えて、結果の解釈を容易にするためこの項目は数値変換を反転し、「頻繁に連絡を取る（少なくとも週2回以上）=3/ときどき連絡を取る（月に1回程度）=2/あまりめったに連絡を取らない（月1回程度以下）=1」とした。最後に「知り合ってから期間」項目に対しては「3年以上/約1~2年/約数カ月~半年/ごく最近」の4件法で尋ねた。この項目も「ごく最近」が1ケースしか該当しなかったため、「約数カ月~半年」と「ごく最近」をカテゴリ合成し、新たに「約数カ月~半年以下」を作成した。また連絡頻度項目と同じく結果の解釈を容易にするために数値変換を反転し、「3年以上=3/約1~2年=2/約数カ月~半年以下=1」とした。これら3つの紐帯項目に関して、重回帰分析を行う際にはそれぞれダミー変数を作成し、独立変数に加えた。

「ネットワークの密度」を測る項目は、「コミュニティの構成人数」と「そのコミュニティにおいて実際に自身と親しい間柄にある人の人数」の2項目であり、回答方法は記述式を用いた。今回の調査では、この2項目を用いて、安田（1997）の密度の計算式を使用する。調査内容から調査対象のネットワークは関係の方向性のない無向グラフとして扱うため、以下の無向グラフのネットワークにおける密度の求め方を採用した。

$$\text{実際にある関係数} / \{ \{ \text{ネットワーク内のノード数} \times (\text{ノード} - 1) \} / 2 \}$$

「ジェンダー自尊心」を測る項目は、Falomir-Pichastor & Mugny（2009）から和訳して使用した。項目は「自分が男性/女性であることに誇りを持っている」、「私は男性/女性である自分自身を高く評価している」、「私は自分が男性/女性であることに非常に満足している」の3項目で構成し、「全くそう思わない/どちらかといえばそう思わない/どちらともいえない/どちらかといえばそう思う/非常にそう思う」の5件法で尋ねた。加えて「全くそう思わない=1/どちらかといえばそう思わない=2/どちらともいえない=3/どちらかといえばそう思う=4/非常にそう思う=5」と数値変換し、3項目を合成して3~15の値をとる1つのジェンダー自尊心変数を作成した。

「自分の思う現在の自身の性別」項目は、セクシュアリティのグラデーション論に則して、「男性/どちらかといえば男性よりである/男性・女性の間である/どちらかといえば女性よりである/女性/男性・女性のどちらでもある/男性・女性のどちらでもない」の7件法で尋ねた。実際に集計したデータでは男性/女性以外の回答が「どちらかといえば男性よりである」が2ケース、「男性・女性の間である」が1ケースの計3ケースしかなかったため、この3ケースをカテゴリ合成して「ノンバイナリ」項目を作成した。分析にあたって「男性=1/女性=2/ノンバイナリ=3」と数値変換し、重回帰分析を行う際にはダミー変数を作成し独立変数に投入することとした。

## (2) 従属変数

「セクシャルマイノリティのカミングアウトの受容度合（CO受容度）」を測る項目は、宮澤・福富（2008）のゲイに対する態度尺度から2項目を用い、さらにオリジナルの項目を4項目を追加し、合計6項目を作成した。宮澤・福富（2008）の「行動を共にすることができる」「つい相手を特別視してしまう」と、オリジナルの「今までと変わらない関係

性を維持したい、またはできると思う」「自分とはセクシャリティが異なると分かっても、頭ごなしに否定せず相手の考え方を尊重しようとする」、「セクシャルマイノリティに関して理解を深めようと行動を起こす」「相手がセクシャルマイノリティであることに抵抗感を感じる」である。各々の項目に対して「全くそう思わない/どちらかといえばそう思わない/どちらともいえない/どちらかといえばそう思う/非常にそう思う」の5件法で尋ね、「全くそう思わない=1/どちらかといえばそう思わない=2/どちらともいえない=3/どちらかといえばそう思う=4/非常にそう思う=5」のように数値変換を行った。「つい相手を特別視してしまう」と「相手がセクシャルマイノリティであることに抵抗感を感じる」の2項目に関しては、逆転項目のため数値を反転させる処理を行った。最後に、分析にあたってこの6項目を合成し、6~30の値を取る1つの「CO受容度」変数を作成した。

## 4 結果

### 4.1 単純集計

#### (1) 属性について

調査は2021年11~12月に行った大学生を対象とした質問紙調査である。最終的に合計102名から回答を得ることができ、調査対象者の年齢は18~23歳である。基本属性から見ると、実家住みの人が70人(68.6%)、1人暮らしの人が29人(28.4%)、その他は3人(2%)であった。生まれた時の性別では、男性が45人(44.1%)、女性が56人(54.9%)、未回答者が1名(1.0%)であり、現在の自分の思う性別では、男性が44人(43.1%)、女性が54人(52.9%)、どちらかといえば男性よりであるを選択した人が2人(2.0%)、男性・女性の間であるを選択した人が1人(1.0%)、未回答者が1名(1.0%)であった(分析では男性/女性以外を選択した者が少数であったため、ノンバイナリに合成した。その場合には3名(2.9%)となる)。

#### (2) ネットワークの紐帯項目について

ネットワークの紐帯の強度尺度を測る項目は、「関係性」「連絡頻度」「知り合ってから期間」の3つである。親しい者との関係性項目では、家族が25人(24.5%)、友人が31人(30.4%)、親友が33人(32.4%)、サークルや部活仲間が8人(7.8%)となった。つぎに連絡頻度項目では、頻繁に連絡を取る(ほぼ毎日)人は46人(45.1%)、ときどき連絡を取る(週1~2回程度)人は39人(38.2%)、あまり/めったに連絡は取らない(月1回程度以下)人は17人(16.7%)であった。最後に、知り合ってから期間項目では、3年以上の人は82人(80.4%)、約1~2年の人は14人(13.7%)、約数カ月~半年以下の人は6人(5.9%)であった。

#### (3) ジェンダー自尊心について

ジェンダー自尊心に関しては質問紙での回答の有無を調査対象者の任意に設定していたため、全体データ102のうち回答は98人から得ることとなった。その中で「自分が男性/女性であることに誇りを持っている」項目では、全くそう思わないが6人(5.9%)、どちら

かといえばそう思わないが7人(6.9%)、どちらともいえないが33人(32.4%)、どちらかといえばそう思うが26人(25.5%)、非常にそう思うが26人(25.5%)となった。「私は男性/女性である自分自身を高く評価している」項目では、全くそう思わないが6人(5.9%)、どちらかといえばそう思わないが11人(10.8%)、どちらともいえないが41人(40.2%)、どちらかといえばそう思うが21人(20.6%)、非常にそう思うが19人(18.6%)となった。最後に「私は自分が男性/女性であることに非常に満足している」項目では、全くそう思わないが3人(2.9%)、どちらかといえばそう思わないが8人(7.8%)、どちらともいえないが31人(30.4%)、どちらかといえばそう思うが24人(23.5%)、非常にそう思うが32人(31.4%)という結果になった。今回の調査対象者に男性/女性以外の性自認の方が少なかったことも要因になっている可能性はあるが、全体的にみてジェンダー自尊心の高い傾向を読み取ることができた。

#### (4) カミングアウト受容度について

カミングアウト受容度では下記の表1より、6項目中「(1)今までと変わらない関係性を維持したい、またはできると思う」「(2) 行動を共にすることができる」「(4) 自分とはセクシャルリティが異なると分かっても、頭ごなしに否定せず相手の考え方を尊重しようとする」、「(5) セクシャルマイノリティに関して理解を深めようと行動を起こす」「(6) 相手がセクシャルマイノリティであることに抵抗感を感じる」の5項目ではセクシャルマイノリティのカミングアウトに対する肯定的な反応が多くみられる結果となった。しかしその一方、「(3) つい相手を特別視してしまう」の項目に関しては、肯定的な傾向を持ちつつもデータにばらつきがみられる結果となった。このような結果となった要因としては、他の質問項目は調査対象者の意思に基づく回答であるのに対して、(3)のみ本人の意識に対する質問項目であるからだと考えられる。また、どの項目を見ても受容度の低い回答のデータが少なからず存在している。ここから、メディアなどで性の多様性に多く触れてきた大学生であっても、いまだにセクシャルマイノリティに対する受容傾向は浸透しきっていないということが読み取れる。

表1 カミングアウト受容度 単純集計

	(1)今までと変わらない関係性を維持したい	(2)行動を共にすることができる	(3)つい相手を特別視してしまう	(4)相手の考え方を尊重しようとする	(5)理解を深めようと行動を起こす	(6)抵抗感を感じる
全くそう思わない	2(2.0%)		36(35.3%)		2(2.0%)	61(59.8%)
どちらかといえばそう思わない	4(3.9%)	2(2.0%)	13(12.7%)		6(5.9%)	18(17.6%)
どちらともいえない	6(5.9%)	2(2.0%)	21(20.6%)	4(3.9%)	14(13.7%)	12(11.8%)
どちらかといえばそう思う	19(18.6%)	17(16.7%)	23(22.5%)	18(17.6%)	29(28.4%)	7(6.9%)
非常にそう思う	71(69.6%)	81(79.4%)	9(8.8%)	80(78.4%)	51(50.0%)	4(3.9%)

## 4.2 分析結果

### (1) 相関分析

まずはじめに「ジェンダー自尊心」、ネットワーク項目の「連絡頻度」「知り合ってから期間」「密度」と「CO 受容度」に相関関係があるのかを検証する。連絡頻度と知り合っから期間項目に関しては、カテゴリの合成と逆転項目のため数値変換の反転を行った上で分析に用いた。その結果を表 1 に示す。

表 2 「ジェンダー自尊心」「ネットワーク項目」と CO 受容度の相関分析

	CO受容度
連絡頻度	.164** (N=102)
知り合っから期間	.174** (N=102)
密度	.245*** (N=78)
ジェンダー自尊心	0.042 (N=98)

\*\*: $p < 0.05$  \*\*\*: $p < 0.01$

表 2 より、連絡頻度項目では相関係数 0.164 有意確率 0.044 であった。そのため CO 受容度に対して連絡頻度変数は正の相関を持ち 5%水準で有意であることがわかった。知り合っから期間項目では相関係数は 0.174 有意確率は 0.038 であった。これは CO 受容度に対して知り合っから期間変数は正の相関を持ち、5%水準で有意であることがわかった。つぎに、密度項目では相関係数 0.245 有意確率 0.003 であった。そのため CO 受容度に対して密度変数は正の相関を持ち、1%水準で有意であることがわかった。しかしその反対に、ジェンダー自尊心項目に関しては相関係数 0.042 有意確率 0.580 であり、相関関係が認められなかった。つまりこの相関分析では、ネットワークにおける紐帯の強度と密度は CO 受容度と正の相関関係があり、またその中でも密度は特に高い相関関係を持つことが分かった。

つぎに「生まれた時の性別」「自分の思う現在の性別」と「ジェンダー自尊心」の相関関係について検証する。自分の思う現在の性別に関しては、ノンバイナリ合成をしたものを使用する。

表 3 性別とジェンダー自尊心の相関分析

	ジェンダー自尊心
生まれた時の性別	0.076 (N=101)
自分の思う現在の性別 (ノンバイナリ合成)	-0.001 (N=100)

\*\*: $p < 0.05$  \*\*\*: $p < 0.01$

表 3 より、今回の調査データの分析からは「生まれた時の性別」と「自分の思う現在の性別」のどちらとも有意性が認められず、ジェンダー自尊心との相関関係を示すことはできなかった。

### (2) 分散分析

ネットワークの紐帯の強度項目の1つである「関係性」と「CO受容度」の関係性に関しては、関係性が質的変数に分類されるため分散分析を使い検証する。表4は記述統計量を示したものであり、表5は分散分析の結果を指す。

表4 関係性とCO受容度の記述統計量

度数	平均値	標準偏差	標準誤差	最小値	最大値	
家族	25	26.7200	3.40979	0.68196	18.00	30.00
友人	31	25.2581	2.86319	0.51424	18.00	30.00
親友	33	26.5152	2.94874	0.51331	20.00	30.00
サークルや部活仲間	8	25.0000	3.25137	1.14953	19.00	29.00
恋人	4	20.0000	4.32049	2.16025	14.00	24.00
その他	1	28.0000			28.00	28.00

表4より、関係性での「家族/友人/親友/サークルや部活仲間/恋人/その他」では、他の項目と比較して、恋人のみ平均値が20.000と低いことが認められた。また、標準偏差の項目から、家族/親友/恋人の3項目で特にデータにばらつきがみられることが分かった。この3項目は、友人やサークルや部活仲間といった項目と比べて対象者とより親密な関係である（強い紐帯を持つネットワークである）と考えられるため、CO受容度の結果にばらつきが出るという結果になったのではないかと考える。

表5 関係性とCO受容度の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
グループ間	191.606	5	38.321	3.942	0.003
グループ内	933.218	96	9.721		
合計	1124.824	101			

表5より、有意確率0.003ということから、1%水準でこの分散分析が有意であるということが分かった。これは、関係性とCO受容度では群によって平均値に差があるということを示す。

### (3) 重回帰分析

本研究の仮説モデルに従って重回帰分析を行った。ここでの重回帰分析では新たに統制変数として「年齢」と「自分の思う現在の性別」を投入した。また、「関係性」「連絡頻度」「知り合ってから期間」「現在の自分の思う性別」の4項目に関してはダミー変数として分析に投入し、各分析1つのカテゴリを落として検証を行った。現在の自分の思う性別では生まれた時に割り当てられた性別と同じ性自認である人をそれぞれ「シス男性/シス女性」と表記し、生まれた時と現在の性自認が異なっている人については「ノンバイナリ」と表記することとする。以下、表6は重回帰分析を4つのケースに分けて表にしたものである。ケース1では、「連絡頻度（あまり/めったに連絡を取らない）」「知り合ってから期間（約数カ月～半年以下）」を投入せず、「現在の自分の思う性別」を上記のように区別せず投入し



ている。ケース2では「連絡頻度(時々連絡を取る)」「知り合ってから期間(約1~2年)」「シス女性」を、ケース3では「連絡頻度(頻繫に連絡を取る)」「知り合ってから期間(3年以上)」「シス男性」を独立変数から抜いて重回帰分析を行っている。ケース4では独立変数の中から「密度」を抜いた場合の重回帰分析の結果である。また、今回の重回帰分析ではすべて有意水準10%を採用している。

表6 重回帰分析結果

	ケース1		ケース2		ケース3		ケース4(密度抜き)	
	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率	B	有意確率
年齢	-0.362	0.293	-0.398	0.272	-0.398	0.272	-0.263	0.362
関係性(家族)			-0.003	0.998	-0.003	0.998	<b>3.839</b>	<b>0.019**</b>
関係性(友人)	-1.095	0.293	-1.028	0.293	-1.028	0.293	<b>3.433</b>	<b>0.032**</b>
関係性(親友)	-0.081	0.931					<b>4.010</b>	<b>0.010**</b>
関係性(サークルや部活仲間)	-0.735	0.601	-0.673	0.618	-0.673	0.618	<b>3.291</b>	<b>0.067*</b>
関係性(恋人)	-2.220	0.245	-2.162	0.257	-2.162	0.257		
連絡頻度(頻繫に連絡を取る)	1.208	0.272	-0.832	0.306				
連絡頻度(時々連絡を取る)	<b>1.986</b>	<b>0.077*</b>			0.832	0.306	-0.221	0.758
連絡頻度(あまり/めったに連絡を取らない)			<b>-2.031</b>	<b>0.075*</b>	-1.199	0.279	<b>-2.237</b>	<b>0.024**</b>
知り合ってから期間(3年以上)	<b>3.564</b>	<b>0.052*</b>	-0.708	0.559				
知り合ってから期間(約1~2年)	<b>4.344</b>	<b>0.020**</b>			0.708	0.559	-0.581	0.580
知り合ってから期間(約数カ月~半年以下)			<b>-4.354</b>	<b>0.020**</b>	<b>-3.646</b>	<b>0.050*</b>	<b>-3.631</b>	<b>0.036**</b>
密度	1.100	0.413	1.059	0.435	1.059	0.435		
ジェンダー自尊心	<b>0.216</b>	<b>0.088*</b>	0.211	0.101	0.211	0.101	0.176	0.122
自分の思う現在の性別(ノンバイナリ合成)	<b>2.168</b>	<b>0.002***</b>					<b>3.455</b>	<b>0.072*</b>
ノンバイナリ			1.538	0.420	<b>3.866</b>	<b>0.043**</b>		
シス女性					<b>2.328</b>	<b>0.005***</b>	<b>1.491</b>	<b>0.029**</b>
シス男性			<b>-2.328</b>	<b>0.005***</b>				

\*:p<1.0 \*\*:p<0.5 \*\*\*:p<0.1

まずはじめにケース1より、CO受容度に対して有意性が認められるものは「連絡頻度(時々連絡を取る)」「知り合ってから期間(約1~2年)」「知り合ってから期間(3年以上)」「ジェンダー自尊心」「現在の自分の思う性別+ノンバイナリ」の計5つであった。「連絡頻度(時々連絡を取る)」に関しては、有意確率0.077で非標準化係数1.986(標準化係数0.292)であり、あまり/めったに連絡を取らない人よりもCO受容度が高いというこ

とが分かった。「知り合ってから期間（約1～2年）」に関しては、有意確率 0.020 で非標準化係数 4.344（標準化係数 0.468）であり、知り合ってから約数カ月～半年以下の人より CO 受容度が高いことが分かった。「知り合ってから期間（3年以上）」に関しても、有意確率 0.052 で非標準化係数 3.564（標準化係数 0.444）で同じことが言える。次に「ジェンダー自尊心」では、有意確率 0.088 で非標準化係数 0.216（標準化係数 0.204）であり、ジェンダー自尊心が高いほど CO 受容度も高いという結果を得ることができた。最後に「現在の自分の思う性別+ノンバイナリ」では、有意確率 0.002 で非標準化係数 2.168（標準化係数 0.374）で、性自認がシスジェンダーの人より、ノンバイナリの方が CO 受容度が高いということが明らかとなった。

つぎにケース2より、CO 受容度に対して有意性が認められるものは「連絡頻度（あまり/めったに連絡を取らない）」「知り合ってから期間（約数カ月～半年以下）」「シス男性」の計3つである。「連絡頻度（あまり/めったに連絡を取らない）」に関しては、有意確率 0.075 非標準化係数-2.031（標準化係数-0.210）であり、時々連絡を取る人よりも CO 受容度が低いことが分かった。「知り合ってから期間（約数カ月～半年以下）」に関しては、有意確率 0.020 非標準化係数-4.354（標準化係数-0.331）で、知り合ってから約1～2年の人よりも CO 受容度が低いことが分かった。「シス男性」に関しては、有意確率 0.005 非標準化係数-2.328（標準化係数-0.351）であり、シス女性の人よりシス男性の方が CO 受容度が低いという結果を得ることができた。

つぎにケース3より、CO 受容度に対して有意性が認められるものは「知り合ってから期間（約数カ月～半年以下）」「シス女性」「ノンバイナリ」の計3つである。「知り合ってから期間（約数カ月～半年以下）」に関しては、有意確率 0.050 非標準化係数-3.646（標準化係数-0.227）であり、知り合ってから3年以上の人より CO 受容度が低いことが認められた。「シス女性」に関しては、有意確率 0.005 非標準化係数 2.328（標準化係数 0.353）で、シス男性よりシス女性の方が CO 受容度が高いことが分かった。「ノンバイナリ」では、有意確率 0.043 非標準化係数 3.866（標準化係数 0.231）で、シス男性よりノンバイナリの方が CO 受容度が高いという結果が明らかとなった。

以上3つの重回帰分析より、CO 受容度に対するそれぞれの独立変数との関連性を知ることができた。まずはじめに、ネットワークの紐帯の強度項目では「連絡頻度」「知り合ってから期間」に関しては紐帯の強度が強いほど CO 受容度が高くなるという結果が得られたが、「関係性」に関しては CO 受容度との有意性が認められなかった。また標準化係数から見ると、連絡頻度より知り合ってから期間の方が相対的に関連が強いと考えられる。次にネットワークの「密度」に関してはどの重回帰分析でも CO 受容度との有意性は認められなかったため、関連性は証明することができなかった。「ジェンダー自尊心」については表6では有意性が認められ、ジェンダー自尊心が高いほど CO 受容度が高くなるということが分かった。表7と表8に関しても有意水準 10%での有意性は認められなかったが、有意確率 0.101 のため比較的有意性のある結果と解釈することができる。次に統制変数として投入した「現在の自分の思う性別」では、性自認がシスジェンダーの人に比べ、ノンバイナリの方が CO 受容度が高いという結果を得ることができた。またその上で、シス女性よりシス男性の方が CO 受容度が低い傾向にあるということが分かった。

さらにジェンダー自尊心と CO 受容度との関係において、図1の仮説モデルから性差に

注目したが、今回の研究では有意性を認めることができなかった。

さらに、ケース4より、上記3つの重回帰分析では有意性を認めることができなかった「関係性」「密度」の2項目に関して興味深い結果を得ることができた。ここでは、密度を投入した重回帰分析では関係性で有意性を認めることはできないが、密度を抜いた重回帰分析では関係性項目の「恋人」を基準として有意性を認められる結果となった。家族は有意確率0.019非標準化係数3.839(標準化係数0.482)、友人は有意確率0.032非標準化係数3.443(標準化係数0.459)、親友では有意確率0.010非標準化係数4.010(標準化係数0.561)、サークルや部活仲間は有意確率0.067非標準化係数3.291(標準化係数0.267)であった。つまり、関係性が家族/友人/親友/サークルや部活仲間の場合は、関係性が恋人の場合よりもCO需要度が高くなるということである。標準化係数から見ると、親友/家族/友人/サークルや部活仲間の順となっており、恋人という関係性を除いて紐帯の強度は強いと想定される関係性順にCO需要度が高いということが言える。今回の分析で「密度」の投入の有無によってこのような結果の違いが出た原因としては、密度がこの重回帰分析における媒介変数になっていたことが挙げられる。当初想定していた仮説では、従属変数であるCO需要度に対してそれぞれの独立変数が個々で作用しているという見立てであったが、実際に分析を進めると関係性とCO需要度の間に密度が媒介変数として働いていたため有意性を認めることができなかったということである。

## 5 考察

本研究の仮説モデルと比較して、前章の研究結果をもとに筆者の考察を行う。まず紐帯の強度に関して、「紐帯の強度が強いほど、CO受容度が高くなる」という仮説は一部立証することができた。連絡頻度では、連絡をほぼ取らない人より連絡を多くとる人の方がCO受容度が高い結果を得た。つまり連絡の頻度が増加すればするほど高くなるというわけではなく、連絡頻度が一定レベルを超えている場合であれば、それ以下の人よりCO受容度が高いという傾向にあるということだ。一方知り合ってから期間は、期間が長くなればなるほどCO受容度が高くなるという仮説モデル通りの結果を得ることができた。関係性に関しては、恋人より他の関係性を持つ人の方がCO受容度が高いという分析結果のみ得ることができた。このような結果の出た要因は、恋人というカテゴリが他カテゴリとは異なる性質のためだと考えられる。恋人は互いのセクシュアリティを前提として形成されている場合がほとんどであり、異なるセクシュアリティのカミングアウトはその前提を覆すため、今回の研究結果ではCO受容度への負の関連を示したと想定される。

つぎに「密度が高いほど、CO受容度が低くなる」という仮説は、密度とCO受容度の相関分析においては支持されなかった。密度の高いネットワークは協調性のある反面、排他的側面を持つという先行研究から負の相関を持つという仮説を立てていたが、今回の研究では反対の結果となった。一方、重回帰分析においては密度とCO受容度との関連性を認めることはできなかった。このような結果が生じた要因としては、今回の質問紙の構成内容に原因があった可能性がある。質問紙では想定した人物と調査対象者自身の所属する

ネットワークの密度を回答してもらった。しかし密度がカミングアウトに効果的な影響を及ぼすためにはそのネットワーク内でのカミングアウトという設定を対象者に施すべきであったと考える。したがって、ネットワークの密度とそのネットワーク内におけるカミングアウト受容度の関連性については、今後の研究で質問紙の構成を改め、再度検証すべきである。

つぎに「ジェンダー自尊心が高いほど、CO 受容度は低くなる」という仮説は、今回の重回帰分析の結果において支持されず、「ジェンダー自尊心が高いほど、CO 受容度は高くなる」という結果を得ることができた。しかし重回帰分析のケース 2, 3 では有意水準 10% に対して有意確率 0.101 であったため、有意性は高いとみられるが、今回の分析結果が確実だとは限らない。今回、仮説モデルや鈴木・池上 (2015,2020) のジェンダー自尊心の持つ効果が男性/女性で異なっているという結果から、ジェンダー自尊心と CO 受容度の関係性における性別に基づく違いについても注目したが、本研究ではその有意性を認めることができなかった。

また、今回は統制変数として重回帰分析に投入した「現在の自分の思う性別」が、CO 受容度に対して偶然にも有意性の認められる結果を示した。「ノンバイナリはシスジェンダーの人より、CO 受容度が高い」「シス男性より、シス女性の方が CO 受容度が高い」という性自認と CO 受容度の関連性が明らかになったのである。前者のノンバイナリがシスジェンダーより CO 受容度が高いという結果は、自身の性自認がセクシャルマイノリティであるという点で、他者のカミングアウトにも寛容であると推測することができる。後者のシス男性よりシス女性の CO 受容度が高いという結果に関しては、男性と女性の性差に基づく要因によるものだと考えられる。これは、鈴木・池上 (2015,2020) の性別によるジェンダー自尊心の及ぼす効果の違いや、Herek(2002)の異性愛者の同性愛者に対する態度の性差に関連するものである可能性が高い。男女で異なった心理的・社会的要因が働いているのではないかということである。しかし性別による CO 受容度の差があるという傾向を指摘出来た反面、その根本的な要因については今回の研究では明らかにできなかった。

## 6 結論

本研究では、大学生を対象にネットワークにおける他者との関係性、ジェンダー自尊心と CO 受容度との関係性やその影響について明らかにすることを目的として、調査分析を行った。具体的には、先行研究から『他者からのカミングアウトにおいて、「ネットワークにおける他者との関係」と「ジェンダー自尊心」は異性愛者の受容傾向にどのような変化をもたらすのか。また、両者に関係性はあるのか』というリサーチクエスションを作成し、2.4 の仮説モデルをたてた。その仮説モデルを軸にオンラインで質問紙調査を実施し、集計したデータを SPSS において分析を行った。

結果としては、筆者の立てた仮説モデルは一部証明できたが、否定的な結果を示すものもあった。また、仮説モデルに組み込んでいなかった独立変数において CO 受容度との関連性を明らかにすることができた。連絡頻度や知り合ってから期間における紐帯の強度に

関しては、紐帯が強いほど CO 受容度が高くなるという仮説モデルを実証できた。関係性に関しては、恋人を基準として他の関係性の方が CO 受容度が高いという結果のみ得ることができた。一方、ジェンダー自尊心に関しては、仮説と真逆の「ジェンダー自尊心が高いほど、CO 受容度が高くなる」という結果を得ることができたが、その調査分析にはまだ検討の余地がある。密度に関しては相関分析では仮説を否定づける結果となったが、重回帰分析では有意性は認められなかった。今後の研究においては、質問紙の構成再度見直し構築することも視野に入れるべきである。仮説の他に得られた結果としては性自認と CO 受容度の関連が読み取れた。ノンバイナリ>シス女性>シス男性の順で CO 受容度が高いということが明らかとなった。この結果となった要因としては、先行研究でも述べられていたジェンダー自尊心における性差などが挙げられるが、その心理的もしくは社会的根本要因は本研究において有意性を認めることができなかった。

最後に、本研究の成果について述べると、ネットワークにおける紐帯の強度とジェンダー自尊心、そして自身の性自認が CO 受容度と関連があることが分かった。今回の研究の課題としては、収集データの規模の小ささ、ネットワーク分析における密度の質問紙構成への不備が挙げられる。今回の反省点を活かして今後の展望としては、収集データを増やし本研究のデータ分析の結果との相違を検証し、さらに密度と CO 受容度の関連性について明らかにしていきたい。今回の研究テーマであるセクシュアリティのカミングアウトに関しては当事者も、カミングアウトを受けた側に関しても、個人によって問題や考え方、価値観も異なり、非常にセンシティブな問題である。現在は日本でも性の多様性概念の浸透も認められるが、今回の研究結果から読み取ると、カミングアウトやセクシャルマイノリティに関する態度は多岐にわたっていた。しかし、筆者はこのような研究を通して、セクシャルマイノリティの方々が生きやすく、さらにセクシュアリティにおける多数派/少数派が問題にならない性の多様性が当たり前認められた社会の在り方を目指していきたいと考える。

## 参考文献リスト

- 安田雪, 1997, 『ネットワーク分析-何が行為を決定するか-』, 新曜社.
- 安田雪, 2011, 『パーソナルネットワーク-人のつながりがもたらすもの-』, 新曜社.
- 高木寛之, 2018, 『地域を基盤とした福祉教育推進のための視点と方法—ネットワーク分析による密度と中心性—』, 山梨県立大学人間福祉学部紀要第13号, p86-99.
- 鈴木努, 2008, 『社会ネットワークの多層性・多重性・多様性』, 社会学論考第29号.
- 薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己, 2019, 『LGBTってなんだろう? 自認する性・からだの性・好きになる性・表現する性』, 合同出版.
- 野沢慎司, 2006, 『リーディングスネットワーク論-家族・コミュニティ・社会関係資本-』, 勁草書房.
- Anthony, Giddens, 1989, "SOCIOLOGY", Cambridge: Polity Press. (=1992, 松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・内田健訳『社会学——第4版』而立書房.)
- ロバート・D・パットナム, 河田潤一(訳), 2001『哲学する民主主義: 伝統と改革の市民的構造』, NTT出版株式会社.
- 平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士, 2010, 『社会ネットワークの研究・メソッド』, ミネルヴァ書房.
- 土場学, 1999, 『ポスト・ジェンダーの社会理論』, 青弓社.
- 安田雪, 2010, 『「つながり」を突き止める: 入門ネットワーク・サイエンス』, 光文社.
- ナン・リン/筒井淳也・石田光規ほか(訳), 2008, 『ソーシャル・キャピタル』, ミネルヴァ書房.
- 鈴木文子, 池上知子, 2020, 『カミングアウトによる態度変容-ジェンダー自尊心の調整効果-』, 大阪市立大学.
- 金田智之, 2003, 『「抵抗」のあとに何が来るのか?-フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて-』, 年報社会学論集 16:126-137.
- 野沢慎司, 2008, 『選択的ネットワーク形成と家族変動』, 家族社会学研究, 20(1):38-44
- Gregory M. Herek, 1988, "Heterosexuals' Attitudes toward Lesbians and Gay Men: Correlates and Gender Differences", The Journal of Sex Research, 25(4)451-477.
- 堀川佑惟 岡隆, 2018, 『Attitudes toward Lesbians and Gay Men Scale 日本語 20 項目版 (ALTG-20)の作成と妥当性の検討』, 社会心理学研究, 34(2)85-93.
- Falomir-Pichastor, J. M.& Mugny.G, 2009, "I'm not gay...I'm a real man!":Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice, Personality and Social Psychology Bulletin, (35)1233-1243.
- 山下玲子, 源氏田憲一, 1996, 『同性愛者に対する態度についての一研究-男女差, メディア接触量を中心として-』, 一橋研究.
- 宮澤 仁・福富 護, 2008, 『同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連』, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, (59) 211-221.